

村山槐多油彩画 連続出品企画リスト

※作品のコンディションによって展示作品および展示期間が変更になる場合があります。

	展示期間（予定）		題名	制作年	サイズ	材質	備考
1	11月5日（土）～12月1日（木）		カンナ	1915年（18歳）	41.0×26.0	油彩・板	槐多の代表作のひとつ、初受賞作となった水彩画《カンナと少女》と槐多の初受賞作の水彩画と同時期に描かれていた油彩画。水彩では表現できなかった立体的な構築性と対象の存在感を、ガランスをふんだんに使って鮮烈に描き出している。手前にあった右上の欠損した板に描いたようで、画材にも窮した貧困生活がうかがえる。アニミズムの要素を造形的に高めた表現となっており、今後の槐多研究に寄与する重要作品。
2	12月3日（土）～12月25日（日）		植物園之景	1916年（20歳）	37.3×45.5	油彩、カンヴァス	「植物園之景 大正五年」と裏紙に自署している。この年5月17日の日記には「午前今関と動物園を見た、後上野の木を写生した。うまく行かぬが明日もやるつもりだ」とある。手前に黒々とした力強い一本の樹を置き、遠景に輝かしいほどの樹の群れと突き抜けるような空を描くことで、明暗の対比と構図の美しさを際立たせている。カンヴァスに置かれた筆のタッチが強くとねり観る者に迫る力を持ちながらも、画面全体には自然の景観のもつ平静な安定感が緩やかに広がる。清透な色彩と光でとらえた大いなる世界観がここにはある。槐多の油彩風景画におけるひとつの到達点を示す傑作。
3	1月7日（土）～2月2日（木）		房州風景	1917年（21歳）頃	33.1×41.0	油彩・カンヴァス	1917年12月末から年明けにかけて、槐多は房州（千葉県）に旅行をしてそこで精力的に油彩画を描いた。日常の苦悩や葛藤から逃れるかのように自然と向き合い、眼前の海をひたすら描いた。日が昇ろうとする海岸、混沌と生い茂る草むらの向こうには象徴的な白い小屋がある。その横の砂浜に続く道の先に見える海が、当時の槐多の希望を表しているかのようだ。絵具の置き方がセザンヌを想起させるが、その影響を受けた時代はすでに過ぎており、大胆で迷いのない筆づかいは、当時をはるかに凌駕する。対象を厳しく見つめ、一連の房州風景のなかでも高次の表現に達した傑作といえる。
4	2月4日（土）～3月2日（木）		房州風景	1917年（21歳）頃	62.0×46.5	油彩・カンヴァス	広大なスケールの海景で、そこに生きる人々の姿をとらえている。彼の本初ともいえる美意識（世界観）が表れた油彩として興味深い。透徹したまなざしで受け容れる自然への畏敬、そこに生きる人々の生命の賛歌。槐多が生涯追い求めた究極の「幸福」のありようが描かれた本作こそ、彼の代表作と言えるのかも知れない。
5	3月4日（土）～3月26日（日）		赤ダリア	1917年（21歳）頃	45.0×38.0	油彩・カンヴァスポー	9月15日生まれの槐多の誕生花「赤ダリア」を描いている。薄塗りで冷たく硬質な壺を写実的に描く一方で、花や枝葉は絵の具を厚く塗り重ね、なまめかしい生気を帯びている。二つの異なる描写が融合し、深遠な存在感を描出した。レンブラントやルーベンスなど巨匠たちの描法を独自に学んだ槐多は、静物画のなかに日本人の精神の高みを表現しようとした。彼の静物画におけるひとつの頂点を示す作品であると同時に、大正期における静物画の領野に新たな視座さえも提示する重要作品。